

Title	恋愛イメージ尺度の作成とその検証：親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から
Author(s)	金政, 祐司
Citation	対人社会心理学研究. 2002, 2, p. 93-101
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9047">https://doi.org/10.18910/9047</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 恋愛イメージ尺度の作成とその検証<sup>1)</sup>

## - 親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から -

金政 祐司(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、恋愛に対する期待や態度として考えられる恋愛イメージと親密な異性関係ならびに愛着スタイルとの関連を検討するために行われた。恋愛イメージ尺度の作成のために収集した自由記述、ならびにその補強として行われたブレイン・ストーミングでの回答から尺度項目の選定し、その後、二度の調査を行った。研究1の回答者は大学生、449名、研究2の回答者は大学生、460名であった。研究1での因子分析の結果、恋愛イメージについて7因子(28項目)が抽出され、さらに研究2において恋愛イメージ尺度の信頼性が概ね確認された。また、研究1の分析から恋愛へのイメージは回答者の性別や異性関係によって異なることが示され、女性は男性よりも「成長」といった恋愛イメージを、男性は女性よりも恋愛を「献身的」なものとして捉えやすいことが、加えて、現在の異性関係が親密である回答者ほど、恋愛に対してポジティブなイメージを持っているという結果が得られた。さらに、研究2では、恋愛イメージと愛着スタイルとの関連が検討され、判別分析の結果得られた2つの判別関数は、愛着軸(“親密さからの回避”と“関係への不安”)と非常に類似した形で3つの愛着スタイルを判別しており、恋愛へのイメージが愛着の概念との関連において重要なものとなり得ることが示された。これらの結果について恋愛イメージ尺度の妥当性および恋愛イメージの継続性という観点から議論を行った。

キーワード: 恋愛イメージ、親密な異性関係、成人の愛着スタイル、性別、プロトタイプの研究

### 問題

恋愛についての研究は、1960年代から1970年代にかけてようやく実証科学的研究の正当な領域となり得たと言える。その理由としては、恋愛の概念が社会的なコンテクストに多大な影響を受けていること、また、様々な統計的手法が確立されるまで愛を実証的に扱えなかったことなどを挙げることができる。それゆえ、愛の定義やアプローチについては様々な理論や見解があるものの、それらについての共通の合意は未だ得られておらず、また、愛と他の対人関係における概念との関連、例えば、親密さや信頼、ケアといったものとの関連についても、現在、研究過程にあると言わざるを得ない。Fehr(1988)のプロトタイプのアプローチからの研究においても、愛の特徴として挙げられていたものは、“ケア”や“幸福”、“他者と一緒にいたいこと”、“親しみ”など多岐にわたっており、愛の概念の複雑さと多種多様性を示していると言える。実際、Hendrick & Hendrick(2000)は、“もし愛の概念が歴史的に変化するのであれば、一つの整然とした愛の科学的理論が、ほんの四半世紀の間でさえ、有力なものとなりえることを期待するのは無理な話であろう(p.203)”と述べており、恋愛への実証的なアプローチの難解さをうかがわせている。

これまでの恋愛への実証的、理論的なアプローチとしては、対人魅力における質的側面の違いに焦点を当て

た Rubin(1970)の恋愛と好意や Walster & Walster(1978)の熱愛と友愛、また、恋愛の多面性に注目した Lee(1977)の恋愛の色彩理論や Sternberg(1986)の愛情の三角理論、さらには、Aron & Aron(1986)の自己拡張としての恋愛や Sternberg(1995)の物語としての愛など、様々なものがある。加えて、その研究の数に見合うほど多く、それらアプローチの構成概念を測定するための尺度が存在すると言っても過言ではない。しかしながら、これまでの恋愛の分類や類型を行うための尺度は、その性質ゆえ、主に理論に添った形で項目構成がなされており、また、それらの尺度は、ある特定の関係における諸経験と、特定の関係には比較的左右されにくい恋愛への期待や態度とを明確には区別できていない。すなわち、特定の相手に対する感情や態度を回答させるための項目と、実際に人が恋愛をどのように捉えているのかという恋愛へのイメージのような比較的継続性を持つものを測定するための項目が、同一の尺度内に混在していると考えられる。例えば、わが国において広く知られる LETS-2(松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田, 1990)は、ラブスタイル(恋愛への態度)を測定するための尺度であるが、これも想定相手への愛情の程度を測定する項目と個人の持つ恋愛観を測定する項目の双方を含有する尺度であると言える。

これまでの研究においては、主に特定の相手への愛情の程度を測定することに焦点を当てた尺度の作成はなされてきた。例えば、Rubin(1970)の恋愛尺度(love scale)と好意尺度(liking scale)や Sternberg(1986, 1997)の Triangular Love Scale (TLS; 愛情の三角理論尺度)は、その代表的なものと言うことができよう。しかしながら、個人の持つ恋愛へのイメージや恋愛観、すなわち、恋愛という事象に対する期待や態度といったものを扱った尺度の作成は、これまであまり行われて来なかった。それゆえ、本研究では、人々が恋愛をどのように考えているのか、といったことについて広く項目収集を行い、恋愛へのイメージについての尺度作成を試みることを目的とする。一般的な恋愛の概念を研究対象とすることは、恋愛へのプロトタイプ的なアプローチと言えるが、本研究における主旨は、Fehr(1988)や Fehr & Russell (1991)の研究のように恋愛の概念の中心性や境界についての検証というよりも、人々が持つ恋愛へのイメージ、それ自体の検証を行うことにある。

金政・谷口・石盛(2001)では、自由記述による恋愛へのイメージが回答者の性別や異性関係によって異なることが示された。このことから、本研究においても作成された恋愛イメージ尺度の下位因子について、同様のアプローチから検討を行い、人々の持つ恋愛へのイメージが性別や異性との関係によって異なるものなのかについて検証する。さらに、恋愛へのイメージは、恋愛という事象に対する期待や態度と捉えることができ、また、それゆえ、比較的継続性を持つ概念であると考えられる。このことから、長期間にわたって安定性を示し、かつ一般的他者への期待や信念として捉えられる成人の愛着スタイルと恋愛へのイメージとの関連を検討することは、その概念的な妥当性ならびに継続性についての示唆が得られるものと考えられ、それらの関連性についても重ねて検討を行うこととする。

### 恋愛イメージ尺度項目の収集

恋愛イメージ尺度の項目については、まず、金政ら(2001)で得られた自由記述を採用することとした。しかしながら、金政ら(2001)で得られた記述は、回答者一人あたりの平均が 1.56(範囲:1~5)であったことから、恋愛に対するイメージとして表面的な部分の回答しか得られていないという危険性を孕んでいる。この問題点を払拭するため、まず、本研究では少人数によるブレイン・ストーミングを行い、人々の考えるより深い部分での恋愛へのイメージについて探ることとした。比較的長時間のブレイン・ストーミングを行うことによって、金政ら(2001)の補強を行うことが可能になると考えられる。それゆえ、恋愛イメージ尺度の項目の選定については、ブレイン・ストーミングでの回答ならびに金政ら(2001)で得られた自由記

述と合わせて行うこととする。

**ブレイン・ストーミング** ブレイン・ストーミングの被験者は大阪大学社会心理学専攻の 11 名の大学生(男性 5 名、女性 6 名)、時間は約 40 分間で、2つのグループに分かれ、以下の教示に従って恋愛に対するイメージを自由に論議することとした。

<ブレイン・ストーミング・インストラクション>

“本研究は、皆さんが持っている恋愛観や恋愛に対するイメージといったことの記述や意見を収集することを目的としています。今回、皆さんに集まってもらったのは、そういったことがらを率直に話してもらい、それらの意見を今後の研究の参考にさせていただくためです。

では、皆さんの恋愛へのイメージについて話していただきたいと思います。私にとって恋愛とは、

のようなものである、というように自分の恋愛に対するイメージを思いつく限り言ってもらい、また、それを他の人との意見の交換を通して発展させてみてください。もちろん、こういった意見には正解、不正解はありませんし、本研究は様々な意見を収集することが目的なので個人的に情報を扱うということはいりませんので、気楽に話してみてください。それでは、よろしくをお願いします。”

このブレイン・ストーミングで得られた回答の基本単位の総数は 154(男性の回答数:77、女性の回答数:77)であった。これらの回答について研究目的を知る研究者 2 名(大学院生)がそれぞれ独立して金政ら(2001)で得られた 15 カテゴリーへの分類を試みたが、それらのカテゴリーには包括されない項目群(相手を独占したい・束縛したいといった項目)が含まれていると仮定されたため、協議の末、さらに 1 つのカテゴリーを増設し、計 16 カテゴリーとした。

**恋愛イメージ尺度の項目選定** その後、本研究の目的を知る者 1 名と、研究目的を知らない社会心理学専攻の大学院生 4 名(男性 2 名、女性 2 名)の計 5 名の判定者が、それぞれが別々に、金政ら(2001)での 247 の自由記述回答ならびにブレイン・ストーミングで得られた 154 の回答を上述の 16 カテゴリーに分類する作業を行った。最終的に各基本単位がどのカテゴリーに分類されるかについては分類者 5 名のうちで分類した人数の多いカテゴリーを最終カテゴリーとして採用した。

次に 16 カテゴリーに分類された総数 401 の基本単位項目について、各項目内容のカテゴリーへの合致性、カテゴリーの各項目内容への合致性および類似したカテゴリー間の調整を大学院生 4 名(男性 2 名、女性 2 名)で協議を行った結果、重複した意味を持つと思われる 2 カテゴリー(衝動、信頼・やさしさ)の分割、類似した項目を含んでいた 2 カテゴリー(相手を思うこと、一緒にいる・いたい)の結合、及び質問項目としては不適当と思われる 1

カテゴリーの削除を行い、最終的に 16 カテゴリーを仮定した(1. 付加価値 2. 必要・大切 3. 成長 4. 苦悩・複雑 5. 衝動・一過性 6. 衝動・見失い 7. 幻想・思い込み 8. あこがれ 9. 相手を思うこと 10. 現実的 11. 楽しい 12. 幸せ・安らぎ 13. 活力&パワー・支え 14. 相互関係 15. 自己犠牲 16. 独占・束縛)。さらに、上述の大学院生 4 名によって、恋愛へのイメージの質問項目としては不適切と思われる項目(例えば、「愛と恋とは違う」など)が削除され、項目の表現の類似性や簡明さを考慮に入れて質問項目の検討を行い、64 項目が選定された。その後、社会心理学を専門とする大学教員 1 名と社会心理学専攻の大学院生 2 名とが協議を行い、表現内容の類似性ならびに類似表現項目の頻度を考慮に入れた結果、47 項目を最終的な項目として選定した。この恋愛イメージについての 47 項目を用いて、以後の調査を行い、尺度の作成を行うこととする。

## 研究 1

上述の方法で選定された 47 の恋愛イメージ項目を基に尺度の作成を行い、さらに、作成された尺度と回答者の性別ならびに異性関係との関連について検討を行う。

### 方法

**回答者と実施方法** 近畿圏ならびに北海道の 6 つの大学において心理学関係の講義を受講している学生を対象に調査を行い、男性 235 名、女性 214 名の計 449 名(平均年齢 19.79 歳、 $SD=2.04$ )の回答を得た。調査時期は、2001 年 4 月下旬~2001 年 6 月下旬で、調査時間は、約 30 分から 40 分であった。

**調査内容** 質問項目は以下のとおりである。(1) 恋愛イメージ尺度: 上述の手順で選定された 47 項目、回答者はそれぞれの項目について“全く当てはまらない = 1”から“非常によく当てはまる = 7”の 7 件法の評価を行った。

(2) 想定異性との関係を問う項目: 回答者に“現在、最も親しい異性”を想定させて、その異性との関係を、1. 恋人、2. BF&GF(友達以上恋人未満)、3. 片思い、4. 友達、5. その他、の中から一つ選択させた。(3) 年齢や性別といった回答者のデモグラフィックな特徴を問う項目群

以上の尺度および項目と合わせて、成人の愛着スタイルや想定異性への愛情、その関係の特徴や評価を問う尺度などを用いて調査を行ったが、研究 1 では、恋愛イメージ尺度の作成ならびに回答者の性別や異性関係と恋愛イメージとの関連を検討することを目的とするため、ここでは恋愛イメージ尺度および回答者の性別と異性関係を問う項目についてのみを報告することとする。

なお、分析は Windows 版 SAS システムを用いて行った。

## 結果および考察

**恋愛イメージ尺度の因子分析** 恋愛へのイメージに関する 47 項目の評価値に対して、因子分析(共通性の初期値として SMC 用い、反復推定をおこなった主因子法)を行った。特定の因子への負荷の低い項目(0.40 未満)や複数の因子へ負荷の高い項目、ならびに共通性の低い項目(0.30 以下)などを考慮して、尺度項目を選択しながら、繰り返し因子分析を行った結果、28 項目が残り、固有値の減衰状況や解釈の可能性から 7 因子を抽出したのち Promax 回転を行った(Table 1)。第 1 因子は、“恋愛なんて所詮アクセサリのようなものでしかない”、“恋愛は遊びだと思う”といった項目に高い負荷が見られたため、「刹那的・付加価値」因子と命名した。第 2 因子は、“恋愛は私の心の支えだと思う”、“恋愛は常にしていたいと思う”といった項目に高い負荷が見られたため、「大切・必要」因子と命名した。以下同様に、第 3 因子は「相互関係」因子、第 4 因子は「独占・束縛」因子、第 5 因子は「成長」因子、第 6 因子は「衝動・盲目的」因子、第 7 因子は「献身的」因子と、それぞれ命名した。Table 1 に示されているように恋愛イメージ尺度は、第 1 因子と第 2 因子は各 6 項目、第 3 因子は 4 項目、並びに第 4 因子、第 5 因子、第 6 因子、第 7 因子は各 3 項目の計 28 項目からなり、その累積寄与率は 51.85%であった。また、各因子における Cronbach の係数は、「刹那的・付加価値」因子が .85、「大切・必要」因子が .85、「相互関係」因子が .81、「独占・束縛」因子が .72、「成長」因子が .76、「衝動・盲目的」因子が .75、「献身的」が .66 と各因子における項目間の一貫性を示すものであった。

因子間相関係数からは、7 因子のうち、「大切・必要」、「相互関係」、「成長」の 3 つの因子間には中程度の相関関係が見られており、因子間の独立性についての問題はあある。しかしながら、各因子に含まれる項目の他の因子への負荷量は、Table 1 に示されたようにあまり高いものではないことから、各下位尺度が比較的分離されたものであると言えるだろう。

**恋愛へのイメージと回答者の異性関係ならびに性別との関連** 上述の因子分析で得られた恋愛イメージ尺度の 7 因子と回答者の最も親密な異性との関係ならびに性別との関連についての検証を行うため、性別と異性関係を要因とし、恋愛へのイメージの各因子の評価尺度値の平均を従属変数とした二要因分散分析を行った(“現在、最も親しい異性”との関係を“その他”とした被験者については、分析の対象から除外した)。

その結果(Table 2)、「独占・束縛」、「献身的」、「成長」において性別の主効果が得られ( $F(7,403)=4.06, p<.05$ ;  $F(7,403)=7.03, p<.01$ ;  $F(7,403)=12.73, p<.001$ )、「独占・束縛」、「成長」では女性の方が有意に高く、「献身的」

においては男性の方が有意にその得点が高かった。また、「大切・必要」、「刹間的・付加価値」、「相互関係」、および「成長」では関係別の主効果が見られた ( $F(7,403)=8.18, p<.001$ ;  $F(7,403)=8.28, p<.001$ ;  $F(7,402)=2.94, p<.05$ ;  $F(7,403)=3.63, p<.05$ )。さらに、多重比較(HSD)を行った結果(Table 2)、「刹間的・付加価値」では「恋人」が「BF&GF」、「片思い」、「友達」よりも有意に得点が低く、「大切・必要」では「恋人」、「BF&GF」が「友達」よりも有意に得点が高かった。さらに、「相互関係」では「恋人」が「友人」より有意に得点が高く、「成長」では「恋人」が「片思い」、「友達」よりも、また「BF&GF」が「片思い」よりも有意にその得点が高かった。しかし、性別と関係別の交互作用はどの恋愛イメージにおいても認められなかった。

これらの結果から、恋愛に対するイメージは、回答者の性別ならびに“現在、最も親しい異性”との関係性によってある程度異なることが示された。

まず、最も親しい異性との関係については、その関係を「恋人」とした回答者は、恋愛に対して比較的ポジティブなイメージを持っていることが、反対に、「友人」とした

回答者は、それらポジティブな恋愛イメージにおいて他の回答者よりも低い値を示していることが分かる。全体的に見ると、最も親しい異性との関係が親密な回答者ほど、恋愛に対してポジティブなイメージを抱きやすかったと言えよう。このような傾向は、金政ら(2001)の自由記述の回答においても見られており、この傾向の堅固さを示すものと考えられる。

また、性差については、女性は男性よりも恋愛を「成長」として捉えやすいことが示されており、これは、金政ら(2001)において見られた傾向と一貫すると共に、大坊(1990)や飛田(1992)の研究で言及されたような女性のタフさや強靭さというものが、別れ時におけるものだけではないということを示す結果であろう。さらに、男性の方が女性よりも恋愛に対して「献身的」なイメージを持ちやすかったことは、LETS-2 において男性の方が女性よりもアガペー的であるという先行研究の結果(松井ら 1990; 和田 1994; Kanemasa, Taniguchi, Ishimori, Kishimoto, & Daibo, 2001)と共通点を示すものとして考えられる。この結果は、特定の相手に対する諸経験のみならず、恋愛という事象自体を献身的なものとして捉え

Table 1 研究1における恋愛イメージ尺度の因子分析結果

反復主因子法 Promax回転	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	Factor6	Factor7	共通性
Q217 恋愛なんて所詮アクセサリのようなものでしかない。	<b>.804</b>	-.009	.008	-.018	-.053	-.046	.089	.678
Q241 恋愛は遊びだと思う。	<b>.764</b>	.134	.081	-.033	-.069	.012	-.133	.518
Q218 恋愛は自分の生活の付加価値に過ぎない。	<b>.749</b>	-.033	.020	.014	.058	-.100	-.007	.581
Q246 恋愛は相手を都合よく利用するものである。	<b>.675</b>	.063	-.108	.075	.068	-.075	-.040	.497
Q215 恋愛など一時的に盛り上がるだけのものである。	<b>.656</b>	-.094	.006	-.014	-.039	.162	.037	.480
Q239 恋愛は時間とお金の浪費である。	<b>.494</b>	-.109	-.093	-.020	.023	.067	.186	.333
Q223 恋愛は常にしていいたいと思う。	.030	<b>.793</b>	.003	.023	-.088	-.048	-.028	.516
Q222 恋愛は私の心の支えだと思う。	-.046	<b>.762</b>	-.085	-.018	.004	.064	.132	.665
Q224 恋愛は私を幸せな気分させてくれる。	-.066	<b>.699</b>	.112	-.017	-.046	.045	-.056	.592
Q221 恋愛をすると自分に自信が持てるようになると思う。	.029	<b>.578</b>	-.135	-.017	.216	.045	-.014	.410
Q233 恋愛をしていると生活に張り合いが出る。	.043	<b>.549</b>	.120	.087	.102	.033	-.127	.451
Q230 恋愛は生きていくために必要なものだと思う。	-.045	<b>.529</b>	.073	-.095	.102	.005	.193	.528
Q227 恋愛には信頼感が大事だと思う。	-.004	-.002	<b>.804</b>	.058	-.036	.045	-.115	.616
Q226 恋愛は互いを助け合い、思いやることだと思う。	-.017	.021	<b>.619</b>	-.010	.206	-.028	.080	.626
Q229 恋愛とは相手のことを思う気持ちである。	-.034	.004	<b>.590</b>	-.043	-.003	-.008	.206	.484
Q242 恋愛はお互いを理解し合うことだと思う。	-.120	.086	<b>.504</b>	.030	.079	-.020	.015	.468
Q236 恋愛をすると相手を独占したくなると思う。	-.093	.018	.001	<b>.842</b>	-.045	-.052	.074	.743
Q243 恋愛は相手を束縛してしまうものだと思う。	.131	-.089	.054	<b>.564</b>	.023	.135	-.013	.403
Q203 恋愛をしていると相手のいろいろなところに干渉したくなる。	-.017	.074	-.027	<b>.540</b>	.063	.017	.064	.375
Q208 恋愛とは自分を磨く機会だと思う。	.055	.082	.029	.037	<b>.699</b>	.070	-.070	.586
Q225 恋愛は新しい自分を発見する場である。	-.032	.231	-.039	.045	<b>.586</b>	-.084	-.013	.507
Q204 恋愛はお互いに成長していくものだと思う。	-.085	-.012	.192	-.063	<b>.558</b>	.033	.048	.520
Q247 恋愛をしていると周りが見えなくなってしまう。	.017	-.060	-.065	.034	.035	<b>.792</b>	.026	.610
Q214 恋愛とは自分の気持ちを押しさえきれなくなってしまうものだ。	.020	.111	.041	-.012	.017	<b>.614</b>	-.022	.445
Q211 恋愛はのめり込んでしまうものだと思う。	-.065	.110	.089	.104	-.044	<b>.543</b>	.050	.533
Q235 恋愛とは相手のためなら何でも出来ることである。	-.065	.061	-.005	.033	-.057	.047	<b>.665</b>	.531
Q205 恋愛とは相手のためにどれだけ自分を犠牲にできるかだと思う。	.109	-.090	.002	.079	.006	.030	<b>.610</b>	.401
Q231 恋愛とは相手に何かをしてあげたいと思うことだ。	.069	.280	.125	.025	.014	-.078	<b>.450</b>	.419
<b>固有値</b>	3.319	3.280	1.743	1.620	1.596	1.549	1.410	14.517
<b>寄与率</b>	11.852	11.715	6.227	5.785	5.699	5.533	5.037	51.847
<b>因子名</b>	<b>因子間相関係数</b>							
Factor1. 刹間的・付加価値								
Factor2. 大切・必要	-.436							
Factor3. 相互関係	-.490	.573						
Factor4. 独占・束縛	-.088	.259	.359					
Factor5. 成長	-.299	.549	.546	.176				
Factor6. 衝動・盲目的	-.188	.360	.412	.465	.244			
Factor7. 献身的	-.134	.368	.404	.409	.150	.449		

Table 2 研究1の恋愛イメージ得点の平均と標準偏差(男女別&関係別)

恋愛イメージ	男性 (n=216)	女性 (n=194)	恋人 (n=141)	BF & GF (n=47)	片思い (n=71)	友達 (n=152)
刹那的・付加価値	2.93 (1.09)	2.80 (1.08)	2.50 (1.03) b	3.15 (1.19) a	2.98 (1.20) a	3.07 (0.97) a
大切・必要	4.77 (1.17)	4.90 (1.14)	5.15 (1.06) a	5.05 (1.12) a	4.78 (1.21)	4.49 (1.15) b
相互関係	5.72 (0.85)	5.79 (0.90)	5.92 (0.83) a	5.80 (0.78)	5.72 (0.99)	5.58 (0.88) b
独占・束縛	4.49 (1.13)	4.73 (1.15) *	4.56 (1.26)	4.92 (1.05)	4.76 (1.19)	4.48 (1.00)
成長	5.23 (1.15)	5.63 (0.90) ***	5.60 (0.95) a	5.69 (0.95) ab	5.18 (1.28) c	5.26 (1.02) bc
衝動・盲目的	4.69 (1.25)	4.74 (1.10)	4.66 (1.12)	5.01 (1.22)	4.92 (1.20)	4.57 (1.84)
献身的	4.10 (1.28) **	3.82 (1.09)	3.98 (1.12)	4.22 (1.30)	4.03 (1.28)	3.85 (1.19)

\*\*\*  $p < .001$ ; \*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$   
各列において異なるアルファベット間に  $p < .05$  の有意差あり

やすい傾向が男性にあることを示すものと言える。

## 研究2

研究2では、研究1で作成された28項目の恋愛イメージ尺度の因子構造の信頼性を確認すると共に、成人の愛着スタイルとの関連を検討することにより、恋愛イメージの概念的な妥当性の検証を行う。

### 方法

**回答者と実施方法** 近畿圏、首都圏ならびに北海道の6つの大学において心理学関係の講義を受講している学生を対象に調査を行った。総数471名の回答を得たが、質問紙の半数以上が欠損値、もしくは明らかに質問紙内容を理解していないと思われる男性6名、女性4名、性別不明1名の計11名について分析対象から除外した結果、男性258名、女性202名の計460名(平均年齢19.84歳、 $SD=1.36$ )の有効回答を得た。調査時期は、2001年10月中旬～2001年11月下旬で、調査時間は、約40分であった。

**調査内容** 質問項目は以下のとおりである(回答者のデモグラフィックな特徴を問う項目群は表紙に配置し、学年、年齢および性別を記入させた)。(1)恋愛イメージ尺度:研究1の因子分析において選定された28項目、回答者はそれぞれの項目について“全く当てはまらない=1”から“非常によく当てはまる=7”の7件法の評価を行った。(2)アダルト・アタッチメント尺度(Hazan & Shaver, 1987):安定型、アンビバレント型、回避型という3つの愛着スタイルについての主な特徴を描写した3つの文章の内から、自分自身を最もよく表していると思われるものを一つ選ぶよう回答者に求めた。なお、アダルト・アタッチメント尺度の邦訳としては詫摩・戸田(1988)のものを使用した。

以上の尺度および項目と合わせて、成人の愛着スタイルや社会的適応に関連する尺度、ならびに想定異性への愛情やその関係の特徴や評価を問う尺度などを用いて調査を行ったが、研究2では、恋愛イメージ尺度の因子構造の信頼性の検証および恋愛へのイメージと愛着スタイルの関連を検討することを目的とするため、ここでは恋愛イメージ尺度とアダルト・アタッチメント尺度についてのみを報告することとする。

### 結果と考察

**恋愛イメージ尺度の因子分析** 研究1の因子分析において選定された恋愛へのイメージに関する28項目の評価値に対して、因子分析(共通性の初期値としてSMC用い、反復推定をおこなった主因子法)を行った。急落法からは6～8因子の可能性が示唆されたが、解釈のしやすさから研究1において得られたものと同じ7因子を指定したのちPromax回転を行った(Table 3)。その結果、前調査とほぼ同様の因子構造が再現されることが確認された(「成長」因子であったQ514の一項目が、「大切・必要」に多少高く負荷している点を除く)。また、恋愛イメージ尺度の累積寄与率は53.35%であり、各因子におけるCronbachの係数は、「大切・必要」因子が.85、「刹那的・付加価値」因子が.85、「相互関係」因子が.84、「独占・束縛」因子が.71、「成長」因子(3項目)が.77、「衝動・盲目的」因子が.71、「献身的」因子が.63であった。

研究2における恋愛イメージ尺度の因子構造は、研究1のもの比べて、各因子への項目の負荷量に若干の変化が見られたものの、その構造は概ね再現されていた。また、累積寄与率や各因子における係数についても、研究1とほぼ同等のものが得られており、これらの結果は、恋愛イメージ尺度の信頼性の高さを示すものであると言える。

**恋愛へのイメージと愛着スタイルの関連** 次に、愛着スタイルと恋愛イメージの関連についての分析を行うため、先行研究(Collins & Reads, 1990; Hazan & Shaver, 1987; Hazan & Shaver, 1990)での分析を参考に、研究2での恋愛イメージ得点を説明変数、3つの愛着スタイル(安定型・アンビバレント型・回避型)を基準変数とした判別分析を行った。その結果、2つの判別関数は合計で  $F(14, 890)=9.13, p<.001$  であり、また、第一判別関数を除いた第二判別関数だけでも  $F(6, 446)=7.86, p<.001$  であった。また、それら2つの判別関数の各々の説明率は63.3%、36.7%であった。Figure 1において恋愛イメージ尺度から得られた2つの判別関数における各愛着スタイル群の重点をプロットしたが、そこから第一判別関数は回避型愛着スタイルを安定型、アンビバレント型の愛着スタイルから判別し、第二判別関数はアンビバレント型愛着スタイルを回避型、安定型の愛着スタイルを判別していることが分かる。これは、恋愛へのイメージによって、3つの愛着スタイルが明確に判別されることを示すものである。

また、Table 4 に示した各恋愛イメージと判別係数との相関関係から、回避型愛着スタイルを安定型、アンビバ

レント型の愛着スタイルから判別するためには、「大切・必要」、もしくは、「刹那的・付加価値」といった恋愛へのイメージが重要なものとなっており、また、アンビバレント型愛着スタイルを回避型、安定型の愛着スタイルから判別するためには、「独占・束縛」、「衝動・盲目的」といった恋愛イメージが重要な役割を担っていることが分かる。

さらに、各恋愛イメージと2つの判別関数との関連を見ると、第一判別関数は、「大切・必要」、「成長」、「相互関係」といった比較的ポジティブな恋愛イメージと負の相関関係を、「刹那的・付加価値」といったネガティブな恋愛イメージと正の相関関係を示していることから、この判別関数を「親密さからの回避」と、また、第二判別関数は「独占・束縛」、「衝動・盲目的」といった恋愛イメージと正の相関関係を示していることから、この判別関数を「関係への不安」と捉えることができる。すなわち、恋愛をポジティブ、もしくはネガティブに捉えているかどうかは、親密さからの回避を意味し(第一判別関数)、また、恋愛において相手を独占・束縛しようとする、恋愛自体に対して感情的で衝動的になることは、恋愛関係に対する不安を意味するもの(第二判別関数)として考えられるのである。そう考えるのであれば、Figure 1 は、「親密さからの回避」が、

Table 3 研究2における恋愛イメージ尺度の因子分析結果

反復主因子法 Promax回転	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Factor5	Factor6	Factor7	共通性
Q513 大切・恋愛は私を幸せな気分させてくれる。	<b>.829</b>	.002	.112	-.042	.031	-.133	-.109	.651
Q512 大切・恋愛は常にしていたいと思う。	<b>.825</b>	.021	-.073	.077	-.042	-.115	-.027	.530
Q507 大切・恋愛は私の心の支えだと思ふ。	<b>.677</b>	-.075	-.004	.095	-.081	.153	-.047	.584
Q510 大切・恋愛をすると自分に自信が持てるようになると思ふ。	<b>.547</b>	.083	-.055	-.111	.057	.058	.171	.373
Q520 大切・恋愛をしていると生活に張り合いが出る。	<b>.545</b>	-.030	-.052	-.104	.178	.138	.111	.522
Q518 大切・恋愛は生きていくために必要なものだと思ふ。	<b>.491</b>	-.081	.051	-.009	-.006	.297	-.007	.537
Q508 刹那・恋愛なんて所詮アクセサリのようなものでしかない。	.001	<b>.768</b>	-.051	-.047	.035	-.063	-.024	.666
Q509 刹那・恋愛は自分の生活の付加価値に過ぎない。	.010	<b>.732</b>	-.023	.002	-.097	-.064	.070	.571
Q524 刹那・恋愛は遊びだと思ふ。	.048	<b>.722</b>	-.027	.046	-.048	.009	-.047	.541
Q511 刹那・恋愛など一時的に盛り上がるだけのものである。	-.065	<b>.691</b>	.048	-.117	.194	-.122	.086	.497
Q523 刹那・恋愛は時間とお金の浪費である。	.013	<b>.681</b>	.124	.105	-.118	.125	-.108	.447
Q527 刹那・恋愛は相手を都合よく利用するものである。	.014	<b>.584</b>	-.199	.228	-.062	.143	.022	.514
Q516 相互・恋愛には信頼感が大事だと思ふ。	-.047	.000	<b>.846</b>	.041	.017	-.048	-.028	.644
Q525 相互・恋愛はお互いを理解し合うことだと思ふ。	-.030	-.064	<b>.722</b>	.118	-.015	-.015	.033	.602
Q517 相互・恋愛とは相手のことを思う気持ちである。	-.012	.017	<b>.670</b>	-.204	.126	.192	-.035	.571
Q515 相互・恋愛は互いを助け合い、思いやることだと思ふ。	.185	-.066	<b>.668</b>	.060	-.118	-.002	.014	.676
Q522 独占・恋愛をすると相手を独占したくなると思ふ。	.002	-.031	.059	<b>.637</b>	.334	-.096	-.029	.597
Q526 独占・恋愛は相手を束縛してしまうものだと思ふ。	-.135	.146	-.004	<b>.632</b>	.073	.169	.003	.461
Q501 独占・恋愛をしていると相手のいるいところ干渉したくなる。	.103	.023	.013	<b>.533</b>	.158	-.024	.045	.395
Q506 衝動・恋愛とは自分の気持ちを押しさきれなくなってしまうものだ。	.091	.010	.076	.161	<b>.579</b>	-.087	.064	.482
Q528 衝動・恋愛をしていると周りが見えなくなってしまう。	-.089	-.032	-.110	.216	<b>.543</b>	.101	-.008	.371
Q505 衝動・恋愛はのめり込んでしまうものだと思ふ。	.128	-.070	.053	.286	<b>.517</b>	.009	-.034	.542
Q519 献身・恋愛とは相手に何かをしてあげたいと思ふことだ。	.093	.034	.243	-.092	.049	<b>.540</b>	.024	.514
Q503 献身・恋愛とは相手のためにどれだけ自分を犠牲にできるかだと思ふ。	-.067	-.003	-.047	.103	-.064	<b>.537</b>	.073	.269
Q521 献身・恋愛とは相手のためなら何でも出来ることである。	.242	.001	-.030	.053	.203	<b>.449</b>	-.056	.462
Q504 成長・恋愛とは自分を磨く機会だと思ふ。	.074	.004	.005	-.013	.055	.066	<b>.829</b>	.793
Q502 成長・恋愛はお互いに成長していくものだと思ふ。	.062	-.200	.282	.198	-.132	.006	<b>.370</b>	.565
Q514 成長・恋愛は新しい自分を発見する場である。	<b>.474</b>	.033	.178	-.017	-.044	-.060	<b>.311</b>	.560
	<b>固有値</b>	3.508	3.434	2.511	1.686	1.403	1.328	1.067
	<b>寄与率</b>	12.530	12.265	8.969	6.021	5.010	4.742	3.810
	<b>因子名</b>	<b>因子間相関係数</b>						
Factor1. 大切・必要								
Factor2. 刹那的・付加価値	-.463							
Factor3. 相互関係	.597	-.564						
Factor4. 独占・束縛	.210	-.089	.149					
Factor5. 衝動・盲目的	.384	-.163	.257	.199				
Factor6. 献身的	.420	-.112	.313	.152	.282			
Factor7. 成長	.454	-.283	.494	.116	.175	.110		

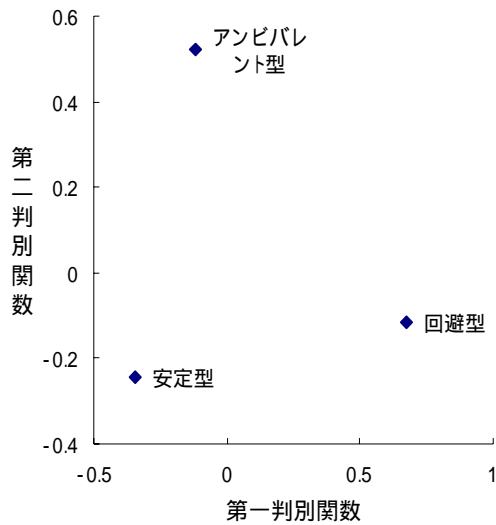


Figure 1 恋愛イメージ尺度から得られた2つの判別関数における各愛着スタイル群の重点のプロット (N=454)

回避型愛着スタイルを安定型、アンビバレント型の愛着スタイルから区別し、「関係への不安」が、アンビバレント型愛着スタイルを回避型、安定型の愛着スタイルを区別するという愛着の概念とも一致する結果であると言える。

これまで、Hazan & Shaver (1987)や Hazan & Shaver (1990)において、両親への印象や仕事に対する態度などによって3つの愛着スタイルが判別されることが明らかにされてきたが、本研究では、それが恋愛へのイメージにおいても示された。この結果は、成人の恋愛関係を愛着過程だとする Shaver & Hazan(1988)の見解を支持すると共に、成人の愛着スタイルを考える上での恋愛へのイメージの重要性を示すものである。

### 総合的考察

本研究は、恋愛イメージ尺度の作成とその信頼性ならびに概念的な妥当性の検証を目的して行われた。2度の調査から、恋愛イメージ尺度の信頼性が確認され、両調査の因子分析の結果から得られた累積寄与率は比較的高いものであった。また、各因子の係数についても2つの調査を通して、その内の一貫性が示された。

また、恋愛に対するイメージは、回答者の性別によって異なっており、女性は男性よりも恋愛に対して「成長」、「独占・束縛」といったイメージを持ちやすく、また、男性は女性よりも恋愛を「献身的」なものとして捉えやすかった。これらは、先行研究(金政ら, 2001; Kanemasa *et al.*, 2001; 松井ら 1990; 和田 1994)とも類似した結果であり、恋愛における女性の強靭さ、もしくは優位性を示すものとして考えられる。

さらに、恋愛に対するイメージは、回答者の異性関係に

Table 4 恋愛イメージと2つの判別係数との相関関係

恋愛へのイメージ尺度	第一関数	第二関数
大切・必要	-.85	.32
刹那的・付加価値	.78	.15
成長	-.67	.01
相互関係	-.65	.39
献身的	-.47	.37
独占・束縛	-.09	.75
衝動的	-.22	.66

よっても異なり、全体的に、想定した異性との関係が親密である回答者ほど、恋愛に対してポジティブなイメージを持っていることを示された。これは、異性関係での親密さが増すに連れて、Eros 得点および熱愛得点が高まる傾向にあることを示した松井(1993)の研究結果とも幾分整合性を示すものである。しかし、本研究では、特定の相手に対する愛情や恋愛のスタイルではなく、恋愛自体へのイメージを研究の対象として扱っているため、異性との関係が親密になるほど恋愛へのイメージがポジティブなものへと変化するのか、もしくは、恋愛に対してポジティブなイメージを持っているほど異性と親密になりやすいのか、それとも、その双方のことが言えるのか、といった問いに対しては回答し得ない。今後は、縦断的研究も含め、それらの点についての検討が必要とされるであろう。

次に、恋愛イメージと成人の愛着スタイルとの関連について検討した結果、恋愛イメージによって3つの愛着スタイルが明確な形で判別されていた。さらに、恋愛イメージの下位尺度得点とアダルト・アタッチメント尺度との判別分析の結果得られた2つの判別関数は、愛着軸(「親密さからの回避」と「関係への不安」と非常に類似した形で3つの愛着スタイルを判別しており、恋愛へのイメージが愛着の概念との関連においても重要なものとなり得ることが示された。この成人の愛着スタイルを同定するためのアダルト・アタッチメント尺度(Hazan & Shaver, 1987)は、4年以上の期間にわたって、かなりの安定性があることがこれまでの研究(Brennan & Shaver, 1995; Kirkpatrick & Hazan, 1994)によって示されていることから、上述のように愛着スタイルとの関連において恋愛イメージが重要な概念となり得たことは、恋愛イメージの継続性を示唆するものとも考えられ、今後は縦断的なアプローチから、その継続性についての検証が求められる。

また、恋愛へのイメージは個人の発達段階によって異なるといったことも十分に考えられる。LETS-2 を用いて、高校生・大学生・社会人を対象に行った研究(佐藤・大坊, 1995; 佐藤・大坊, 1996)では、恋愛意識が年齢によって異なることが示されており、その理由として恋愛の経験が



挙げられている。恋愛へのイメージがラブスタイルのように恋愛経験によって変容する可能性は多分にあるであろうし、また、環境の違いによっても恋愛イメージは異なることが考えられる。この点については、横断的研究を行って検証する必要がある。

本研究において作成を行った恋愛イメージ尺度は、特定の相手を想定させない形で回答を求めため、回答者に親密な異性がない場合においても恋愛に対する期待や態度を測定することができ、また、これまでの尺度のように想定相手如何によって、尺度の得点が変わることもない。このような利点を生かし、今後は、この恋愛への期待や態度として考えられる恋愛へのイメージが実際の親密な異性関係における行動的、感情的側面にどのような影響を与えるのかについて検討していく必要があるだろう。さらに、恋愛イメージ尺度と既存の尺度との関連性を検討することも今後の重要な課題として挙げることができる。

## 引用文献

- Aron, A., & Aron, E. N. 1986 *Love and the expansion of self: Understanding attraction and satisfaction*. New York: Hemisphere.
- Brennan, K. A., & Shaver, P. R. 1995 Dimensions of adult attachment, affect regulation, and romantic relationship functioning. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 267-283.
- Collins, N. L., & Read, S. J. 1990 Adult attachment working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644-663.
- 大坊郁夫 1990 異性間の関係崩壊についての認知的研究 日本社会心理学会第29回大会発表論文. 64-65.
- Fehr, B. 1988 Prototype analysis of the concepts of love and commitment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 557-579.
- Fehr, B., & Russell, J. A. 1991 The concept of love viewed from a prototype perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 425-438.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1990 Love and work: An attachment-theoretical perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 270-280.
- Hendrick S. S., & Hendrick, C. 2000 Romantic Love. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close Relationships* (pp.203-215). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 飛田 操 1992 親密な関係の崩壊時の行動特徴について 日本心理学会第56回大会発表論文. 231.
- Kanemasa, Y., Ishimori, M., Taniguchi J., Kishimoto W., & Daibo I. 2001 Love styles and romantic love experiences (2). *Asian Association of Social Psychology: The 4th Annual Conference*.
- 金政祐司・谷口淳一・石盛真徳 2001 恋愛のイメージと好意理由に及ぼす異性関係と性別の影響 対人社会心理学研究, **1**, 147-157.
- Kirkpatrick, L. E., & Hazan, C. 1994 Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study, *Personal Relationships*, **1**, 123-142.
- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.
- 松井 豊 1993 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, **64**, 335-342.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短期大学紀要, **23**, 13-23.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- 佐藤靖子・大坊郁夫 1995 青年期における恋愛意識の多次元の検討 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文. 118-119.
- 佐藤靖子・大坊郁夫 1996 青年期における恋愛意識の多次元の検討(2) 日本グループ・ダイナミクス学会第44回大会発表論文. 216-217.
- Shaver, P. R., & Hazan, C. 1988 A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 473-501.
- Sternberg, R. J. 1986 A triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 119-135.
- Sternberg, R. J. 1995 Love as a story. *Journal of Social and Personal Relationships*, **12**, 541-546.
- Sternberg, R. J. 1997 Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, **27**, 313-335.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度 成人愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 和田 実 1994 大学生の性に対する態度 性行動と恋愛について 東京学芸大学 1 部門, **45**, 155-165.
- Walster, E., & Walster, G. W. 1978 *A new look at love*. Reading, MA: Addison-Wesley.

## 註

- 1) 本論文は、筆者の修士論文(平成13年度大阪大学)の一部に加筆・修正を行ったものである。調査の実施にあたり、木下富雄先生、白樫三四郎先生、高橋依子先生、木村昌幸先生、金川智恵先生、竹西亜古先生(甲子園大学)、荘巖舜哉(大阪学院大学)、吉野絹子先生(摂南大学)、有馬淑子先生(京都学園大学)、鹿内啓子先生(北星学園大学)、川名好裕先生(川村学園女子大学)、広沢俊宗先生(関西国際大学)、瀧本誓先生(道都大学)のご協力を頂きました。ここに深く感謝の意を表します。

## **The images of love: Intimate opposite-sex relationship and adult attachment style**

Yuji KANEMASA (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Several studies were conducted to examine the relationships between the images of love considered as expectations or attitudes toward love and subjects' intimate opposite-sex relationship and adult attachment style. For developing Love Image Scale, items were selected from answers to an open-ended question and results of brainstorming. After that, two researches were conducted. Subjects were 449 students in Study 1 and 460 students in Study 2. Factor analysis in Study 1 revealed seven factors (28 items) underlying the images of love, and the reliability of the Love Image Scale was almost confirmed in Study 2. In Study 1, the images of love were found to be related to subjects' gender and intimate opposite-sex relationship; females tended to think of love as "growing" more than males, and males were more likely to have "devoted" image on love than females, and also, subjects who were currently involved in an dating relationship had relatively positive images on love. Study 2 examined the relationships between the images of love and attachment styles. Discriminant analysis revealed two discriminant functions clearly distinguished three attachment styles, and, in addition, they could be interpreted as attachment dimensions ("comfort with closeness" and "anxiety over relationship"). These results were discussed in terms of the continuity of the images of love and validity of the Love Image Scale.

Key words: images of love, intimate relationship with opposite sex, adult attachment styles, gender, prototypical approach.